

短 報

病棟実習と外来実習を組み合わせた 臨地実習成人看護学実習（慢性期）の構築

飯岡由紀子¹⁾ 高田 幸江¹⁾

Structuring for Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) that Combines Ward and Outpatient Care

Yukiko IIOKA, RN, PHN, PhD¹⁾ Yukie TAKADA, RN, MSN¹⁾

〔Abstract〕

Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) was developed that combined ward and outpatient care to reflect recent circumstances in medicine. The primary aim of this paper is to report on that structuring process. Practice goals, content, and methods were deliberated during repeated discussions held between the clinical practice instructors and nursing administrators from the department overseeing practice at the training facility. Based on those discussions, the Adult Nursing Practice (Chronic Illness and Conditions) was structured for 1 week of practice in the hospital ward and 1 week of outpatient practice. In accordance with the practice aims (Level II) of the overall curriculum, nursing practice was carried out by assigning 1 patient to take charge of after the second day of training in the outpatient practice. Record sheets were also newly developed for the outpatient practice. Furthermore, the essential training points included key considerations for effective practice since the practice took place in the busy outpatient department where teachers and practice instructors are not usually incorporated into the system. Students said they gained a better understanding of the role of outpatient nursing.

〔Key words〕 chronic illness and conditions nursing, nursing practice, outpatient care

〔要 旨〕

近年の医療事情を反映し、病棟実習と外来実習を組み合わせた成人看護学実習（慢性期）を開発した。本稿ではその構築プロセスを報告することを主な目的とした。実習担当部署の看護管理者や実習担当者との討議を繰り返し、実習目標、実習内容、実習方法を検討した。この討議を踏まえ、成人看護学実習（慢性期）は1週間の病棟実習と1週間の外来実習で構成した。カリキュラム全体における実習目標（レベルⅡ）を踏まえ、外来実習でも実習2日目以降は担当患者1名を設定して看護実践を行うこととした。また、外来実習のための実習記録用紙を新たに開発した。更に、多忙な外来診療部門における実習であり、常に教員や実習指導者が関われる体制をとれない状況にあるので、効果的な実習とするための留意事項を実習要項に含めた。外来実習を行った学生からは、外来看護の役割に関する理解が深まったことが語られた。

〔キーワード〕 慢性期看護、臨地実習、外来看護実習

I. はじめに

超高齢社会の到来や医療費高騰を背景に、1990年代以

降は在院日数の短縮化が図られ、急性期状態を脱した慢性疾患や慢性期状態にある人々が地域で生活するようになり、医療は施設医療から外来診療や在宅医療へとシフ

1) 聖路加看護大学 成人看護学（慢性） St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing, Chronic Illness and Conditions Nursing

トしてきている。更に、治療法や薬剤の発展を基盤として患者のQOLを重視した治療法の選択が行えるようになり、比較的侵襲の強い治療も外来で行えるように医療が発展してきた。そして2002年の診療報酬に外来化学療法加算が加わったことで外来化学療法が定着した。このように、外来診療へのシフト化が進み、治療や症状緩和など多岐にわたる医療が外来で提供されるように発展してきた。今後、患者や家族が安心して外来通院したり、在宅療養するには、外来看護をより発展させることが重要となる。

一方、看護基礎教育課程において、このような医療事情を反映した教育が提供できているとは言い難いだろう。将来の看護を担う学生には、近年の医療事情を反映した教育を提供することが重要と考えられる。とりわけ外来診療への移行は慢性期看護の領域において重要になると考える。慢性疾患及び慢性的な健康課題をもつ人々への看護は、病と共に生活する人々を理解し、その人の生活に合わせたセルフケア能力が向上するよう支援し、生活の調整・再構築を援助することである。これは、外来診療において求められている看護と考えることができるだろう。

そして、上記の医療事情を反映して入院患者の高齢化が進行してきた。施設の特徴にもよるが、内科病棟の入院患者は主に70歳以降で占められる。慢性期看護で重要視している病と共に生きること、つまり病とどのようにつきあうのか、生活と治療をどのように両立するのか学ぶことにおいては、生産年齢の患者を含めることも重要と考えられる。例えば、仕事をしながら、経済的な課題を抱えながら、育児をしながら、どのように病と共に生きているのか、その体験を理解し、支援を考えることが重要である。

以上より、病棟実習だけでなく外来実習も含めることは、慢性期看護実習において重要な意義を持つと考えるに至った。そして、外来実習をどのような方法で行えば効果的な学習となるのか、また学習環境や学習課題をどのように整えれば良いのか検討する必要がある。

本学では、2011年度より新カリキュラムが導入された。新カリキュラムでは、実習期間や実習目標の見直しもを行い、臨地実習成人看護学実習は、看護実践能力の向上をはかるため、旧カリキュラムでの運用よりも実習期間を延長することとした。旧カリキュラムは急性期看護と慢性期看護実習を統合した3週間実習(4単位)であったが、それぞれ2週間(2単位)の実習展開へと変更した。

以上より、ここでは新カリキュラムにおける臨地実習成人看護学実習(慢性期)2単位の実習を構築する経緯を報告することを主な目的とした。従来の病棟実習だけでなく外来実習も組み合わせる形での実習内容を開発したため、特に外来実習内容と方法の構築課程に焦点を当

てて報告する。

II. 慢性期看護実習のあり方検討

上記の医療事情の背景を踏まえ、外来実習のあり方に関する文献を検討した。ごくわずかであるが、外来実習に関する報告があった。文献では、いずれも病棟実習の期間中に半日～1日の見学実習または体験型実習を組み込む形態であり、外来化学療法室や透析室にて実習していた^{1)~4)}。学生の実習記録を分析した結果では、それらの実習により、学生がその人らしい生活や人生を送ることの重要性や、患者の生活に合わせたセルフケア能力向上への援助や、治療が患者や家族に及ぼす影響などを学ぶことができると報告されていた^{1)~4)}。

以上より、外来実習において多様な学びが得られることが明らかとなり、本学の実習に外来実習を組み込む実習を企画した。病棟実習と外来実習を組み合わせる実習は新たな試みであり、実習目標から実習の具体的な内容に至るまで、実習施設との討議を含めて2年にわたり検討を重ねた。

1. 実習施設の病棟実習担当者とのキックオフミーティング

新カリキュラムが開始された2011年11月に実習施設の病棟看護管理者と大学教員実習担当者でキックオフミーティングを開催した。新カリキュラムにおける新たな実習形態に関して、率直な意見交換を行った。実習形態として、実習病棟を現行より多く設置する方法、実習施設を現行より拡大する方法、外来実習を設ける方法を提案し、学生の学び、実習目標設定、実現可能性などについて討議した。実習病棟を多くする方法は、大学の教員不足、病棟の実習指導者の人員不足、実習指導のための教育システムの不足が大きな課題として明確になった。一方で、外来実習を設けることに対して、その可能性があることが話し合われた。

この会議結果を踏まえ、病棟実習1週間、外来実習1週間の形態として、学内で実習内容と実習方法に関して具体的に検討した。外来実習場所として、外来化学療法センター、腎(透析)センター、心臓リハビリテーションセンター、放射線治療科を候補として抽出した。各部署ともに、看護師の人員に応じた学生配置が必要となるため、各部署に学生2～3名の配置にすると、外来実習場所の更なる拡大も必要となった。新たな実習施設の開拓を行い、外来実習のために実習施設を1カ所追加するよう調整した。

これらを踏まえ、成人看護学実習(慢性期)における実習目標の設定、実習内容、実習方法実習要項の作成などの原案を作成した。

2. 各実習予定部署の担当者との会議

2012年7月～9月にかけて、病棟実習および外来実習の予定部門の看護管理者および担当者として、上記の実習原案について実現可能性、実習目標や実習方法における改善点などを討議した。主な討議内容は、1) 見学や体験型実習とするのか、看護実践を含む実習内容とするのか、2) 看護実践を含む場合、担当患者が毎日変更になることが多く、それを学生がどこまで理解できるのか、3) 看護実践をする場合には、外来看護師が指導者として対応できない場合が多いが、指導体制をどのように整えるのかであった。

1) 実習方法（見学・体験型実習 or 看護実践を含む実習）について

これは、実習目標の設定に関する討議内容と捉えたため、実習目標を再検討した。本学の場合、実習目標の基盤としてカリキュラム全体の実習目標を踏まえる必要がある。本学ではカリキュラム全体(4年間の基礎看護教育)における実習目標は3段階のレベルとして設定し、臨地実習はレベルⅡの目標となる(表1)。レベルⅡの目標の概要は、看護過程の展開であり、対象理解を深め、その対象に応じた看護の立案・実施・評価の一連のプロセスを踏まえて看護を発展することである。これを踏まえ、外来実習において実現可能な実習方法や実習内容、期待できる学びなどを検討した。また、多忙な外来診療部門で、看護師の人員も制限される中、学生への対応が実現可能なのかということも討議した。最終的に外来実習においても見学や体験型実習ではなく、担当患者を決めて、看護計画を立案し、看護実践を含めることが望ましいという結論に至った。ただし、予定していた担当患者が来院しないなどの不測の事態が予測されるため、外来診療の状況で可能な範囲である程度の柔軟性をもった看護実習を展開することで収束した。

2) 担当患者が毎日異なることについて

これは外来診療部門によっても異なる。例えば、腎(透析)センターや、放射線治療科では、実習期間中は同一の患者を担当することができるが、外来化学療法センターは毎日異なる患者を担当することになる。外来診療部門の特性に応じて臨機応変に対応することが望ましいと考えた。同一患者を担当できる場合は、同一患者による学習が深まるよう努めることとし、同一患者を担当できない場合は疾病や治療の類似性を考慮して担当を決定することとした。疾病や治療の類似性が考慮できない場合には、学生の実習負担を考慮して、担当患者の人数を減らすなどの対応策を考慮することとした。

3) 指導体制について

学生には、多忙な外来であるが、外来施設の指導者に朝の実習内容の相談・調整を密にして、タイムマネジメントを具体的にを行うように指導することとした。実習状

況の確認、実習記録の指導のために教員や実習指導者が巡回する体制を整えた。カンファレンスについても検討し、日々の実習終了間近に短いまとめの会を開催し、更に1週間の実習のまとめとしてのカンファレンスを設定することとした。

3. 全体会議

2013年6月に各実習部門の看護管理者と大学の実習担当教員がすべて集合するよう調整し、実習施設の看護部長および看護部教育担当者も含めて全体討議を行った。上記の検討結果を報告し、最終調整を行った。実習概要に関しては了承が得られた。更に、担当患者の承諾、実習中のトラブル発生時の対応、電子カルテの閲覧などについて討議した。PHSにて大学教員といつでも連絡できる体制を整えた。また、学生の配置に際して各外来診療部門の多忙時期や人員状況を把握した。

Ⅲ. 成人看護学実習(慢性期)の実習概要

1. 実習目標

「慢性・長期的な健康問題を持つ患者とその家族が、病とともに生きることの認識と対処法を習得し、療養の場の特徴を踏まえて自らの生活を調整・再構築するように援助できる」と設定した。

2. 実習方法

1週間の病棟実習と1週間の外来実習を行い、2週間の実習の総括として、実習総括レポートを提出することとした。

1) 病棟実習

原則として1名の患者を受け持ち、実習を行う。記録物は、患者プロフィール、関連図、日々の看護計画と経過記録、時系列で記入する経過記録用紙などとなる。本稿では、外来実習に焦点を当てて報告する。

2) 外来実習

(1) 事前学習

外来実習を行う部門は、治療や疾病が特化されていることが多いため、事前学習を設定することとした。事前学習の共通する課題としては、A) 通院治療している患者の病態ならびに治療・看護の特徴、B) 通院治療している患者のソーシャルサポート(患者会や経済的支援など)とした。更に、外来実習部門の特性に応じた学習テーマを設定した。外来化学療法室では化学療法と副作用とその看護を、透析センターでは慢性腎臓病や腎代替療法や血液透析とその看護を、放射線治療部門では放射線治療とその看護など、外来実習の状況に応じた課題を追加して学習課題とした。

(2) 実習内容

表1 聖路加看護大学 実習レベル目標

<p>レベルⅢ 総合実習 ・看護実習Ⅰ ・介護実習Ⅰ ・公衆衛生看護学実習Ⅰ</p>	<p>保健医療福祉システムならびに長期的な時間的予測の観点を含めて、個人・家族・集団（組織・チーム）・社会という看護の対象の広がりを理解できる。</p>	<p>人間・環境・看護の相互作用を主体的に評価・修正し、発展させることができる。</p>	<p>情報収集、課題判別、計画立案、実施、評価の一連のプロセスを効果的に活用する。</p>	<p>主体的に、対象の状況に適した方法を選択・創造し、安全安楽に看護技術を提供できる。</p>	<p>チームアプローチにおける看護の役割を認識し、チームの一員として主体的にメンバーシップをとることができる。</p>	<p>・対象に誠実に向き合い、真摯な態度で行動できる。 ・内省に基づき、対象の価値観を尊重し、その人にとつての最善を考えて行動できる。 ・自己洞察を深め、倫理的・建設的思考をもつことができる。 ・看護実践を通して、看護に対する自分の考えを述べることができる。</p>
<p>レベルⅡ 小児看護学 ・周産期看護学 ・成人看護学（急性期） ・成人看護学（慢性期） ・老年看護学 ・精神看護学 ・地域・在宅看護学実習</p>	<p>生涯発達、健康状態、生活の変化、文化や地域という観点から、各領域における対象の個別性を理解できる。そのことを通じて、看護の対象の多様性を理解することができる。</p>	<p>人間と環境と看護との相互作用を通して看護職としての関係を構築することができる。</p>	<p>看護実践に必要な情報を収集し、看護上の課題を判別し、計画・立案・実施・評価できる。</p>	<p>対象の特性・反応に合わせた看護技術を根拠を踏まえて選択し、安全安楽に実施できる。</p>	<p>自分が提供する看護ケアを表明し、必要な支援を求めることができ、対象を取り巻く保健医療福祉チームと、各メンバーの役割を理解することができる。</p>	<p>医療チームメンバーにおける看護師の役割を考える。医療チームメンバーにおける看護学生としてのメンバーシップをとれる。</p>
<p>レベルⅠ コミュニケーション実習 ・基礎看護技術実習 ・看護展開論実習</p>	<p>看護の対象としての個人・家族・生活環境を理解することができる。</p>	<p>自分の関わりを通して、人間と環境と看護の相互作用を理解し、対象のニーズをふまえて、行動できる。</p>	<p>看護実践に必要な情報を収集し、日常生活行動における看護上の課題を判別し、計画・立案・実施できる。</p>	<p>原理・原則に基づいて、看護技術（ヘルスケアコメント技術、生活支援技術）を安全安楽に実施できる。</p>	<p>チームアプローチ</p>	<p>看護職としての責務・倫理</p>
<p>レベル</p>	<p>看護の対象 (人間・環境)</p>	<p>相互作用</p>	<p>看護実践のための 思考過程</p>	<p>看護技術の実施</p>	<p>チームアプローチ</p>	<p>看護職としての責務・倫理</p>

要素

実習初日は、各外来施設で通院治療を受ける患者や家族の特性と、対象者へ提供されている看護の概要について理解を深めるとともに、翌日担当する予定患者の情報収集を行うこととした。

2日目以降は、担当患者への看護過程を踏まえた実践を行う。状況に応じて2名以上となる場合や、担当予定であった患者が来院されない場合などもあるが、実習場所の状況を踏まえ、各外来実習の指導者の指導に応じた実習を行う。初日の集合場所や集合時間、遅刻欠席の対応などを、外来実習部門ごとに一覧として提示した。

(3) 実習記録用紙 (資料 1)

実習初日の記録は、外来治療の特徴と外来看護の特徴を記載する用紙を作成した。2日目以降は担当患者の看護過程を展開できる用紙として構成した。また、病と共にとどのように生活しているのかを具体的な視点で整理するため、「健康上の問題にどのように対処していたか」「生活をどのように調整・再構築していたのか」「気持ちの変化にどのように対処していたのか」という項目を設けた。実習当日までには看護問題と看護活動を立案し、実習後には実施した看護活動とその結果、およびそれに対する評価を記載するよう設定した。

そして、担当患者の看護問題と看護活動の他に、行動計画を記載する欄を担当患者の看護以外の活動も含めるために設定した。これは、担当患者の外来受診や治療の中断などが予測され看護実践ができない場合があること、担当患者の来院時間が短い場合や、担当患者への看護実践以外に患者会や勉強会の機会があり多職種連携やチーム医療の学びやソーシャルサポートに関する学びを深める貴重な機会であること、などの理由から実習時間を有効的に活用するために設定した。

(4) 外来実習における留意事項

外来実習では常に教員や実習指導者が学生の指導に関わる体制をとれないため、学生が主体的に実習できるための具体的な留意点を実習要項に加え、学生に周知するよう努めた。詳細は以下のとおりである。

- a. タイムマネジメントも自分で主体的に管理する必要があるため、受身的な態度ではなく自ら看護師に声をかけて時間調整すること。
- b. 事前学習を踏まえ、当日の行動をある程度想定してから実習に臨むこと。
- c. 場の状況や特徴を踏まえた行動をすること。診療の状況や患者の予約状況により、忙しさや業務内容に相違があるので、周囲の状況を踏まえて自らの行動をとること。
- d. 実習目標や行動計画を明確にし、毎朝、看護師に具体的に伝えること。
- e. 患者への医療が優先されることを踏まえ、実習における行動を配慮すること。

- f. 実習前には実習施設のホームページを確認すること。
- g. 時間的な余裕を持った行動をとること。

IV. おわりに

1週間の外来実習を行うことは、既存文献でも報告されておらず、看護基礎教育課程において新たな試みの一つと捉えることができる。また、これは近年の医療事情を反映した教育を実践する上でも重要な一歩といえるだろう。新たな試みであるゆえ、実習目標をはじめ、具体的な実習内容や方法に至るまで、検討を繰り返す必要があったが、この過程を踏まえることで成人看護学実習(慢性期)の学習目標やカリキュラムの位置づけなどに関して深く考える機会となった。近年の医療事情を反映することは看護の新たな可能性を考えることにもつながり、この過程の重要性を改めて実感した。

本稿は、実習開発過程を報告したものであり、実習は2013年9月から開始されたため、実習効果の評価はできていない。しかし、学生からは「外来にたくさんの看護があることを初めて知った」「通院治療する患者にタイミングよく看護師がケアを提供するという高度な看護が展開されていると感じた」「治療初期の患者からベテランの患者まで多様な患者がいて、それぞれに多様な課題を抱えていて、それらを個別性に応じて対応する外来看護師はすごいと思った」「医師、薬剤師、看護師が連携して、それぞれの役割を担いながらチームで医療を提供していることを実感した」など、多くの学びが得られたことをまとめた会で語っている。学生たちは、病とともに生きるという患者の体験をより理解し、外来診療においてどのように支援するのか、看護の継続性を含めた慢性期看護について深い学びが得られていると感じている。

既存文献の外来の体験型実習における学生の学びには、「セルフケア支援」「症状緩和や合併症対策」「安全で確実なケア」「治療以外の日常生活への配慮」「安心できる環境の調整」の外来看護師の役割を学習することや、「看護の継続性」「チーム医療」などのチームの連携に関する学びが得られると報告されている¹⁾。本稿の成人看護学実習(慢性期)においても、同様の学びが得られると予測されるため、今後の課題は、成人看護学実習(慢性期)における学生の学びや学習効果を、質的分析などにより明らかにしたいと考えている。

引用文献

- 1) 長瀬雅子, 高谷真由美, 青木きよ子他 (2011): 慢性的な疾患/状態を抱える成人患者を対象とした看護学実習における体験型実習の意義, 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 8 (1), 1-7

- 2) 佐名木宏美, 武居明美, 堀越政孝他 (2007): 成人外来継続看護実習での人工腎臓センターにおける学生の学び, 群馬保健学紀要 28, 31-39
- 3) 宮崎貴子, 丹羽淳子, 大西潤子他 (2007): 看護基礎教育における外来がん化学療法見学実習のあり方の検討

- 成人看護学臨地実習における外来見学実習の取り組み -, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要第 20, 25-35
- 4) 田中克子, 海津美香, 小田和美他 (2004): 成熟期看護学実習の外来実習と透析室実習で捉えた「看護」の比較, 岐阜県立看護大学紀要 4 (1), 133-139

<p style="text-align: center;">外来治療の場における実習 記録用紙 (外来実習 1 日目)</p> <p>月 日 曜日 () 氏名 ()</p> <p>学籍番号 ()</p> <p>I. 外来治療の特徴について</p> <p>II. 外来看護の特徴について</p> <p>III. ナースからのコメント</p> <p>IV. 本日の実習を通して学んだこと</p>	<p style="text-align: center;">外来治療の場における実習 記録用紙 (外来実習 2 日目以降)</p> <p>月 日 曜日 () 氏名 ()</p> <p>学籍番号 ()</p> <p>I. 担当する患者のプロフィール</p> <p>1) 患者の概要: 年齢, 性別, 家族構成, 職業など</p> <p>2) 既往歴とその治療歴</p> <p>3) 現病歴</p> <p>II. 実習目標</p> <p>III. 担当する患者の看護問題, 看護活動</p> <p>IV. 行動計画 (時系列で行動を記入する)</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">—</td> <td style="text-align: center;">8</td> <td style="text-align: center;">9</td> <td style="text-align: center;">10</td> <td style="text-align: center;">11</td> <td style="text-align: center;">12</td> <td style="text-align: center;">13</td> <td style="text-align: center;">14</td> <td style="text-align: center;">15</td> <td style="text-align: center;">16</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">—</td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> <td style="text-align: center;"> </td> </tr> </table>	—	8	9	10	11	12	13	14	15	16	—										<p>V. 患者および家族が, 病とともにどのように生活しているか</p> <p>1) 健康上の問題にどのように対処していたのか</p> <p>2) 生活をどのように調整・再構築していたのか</p> <p>3) 気持ちの変化にどのように対処していたのか</p> <p>VI. 実践した看護活動とその結果, およびそれに対する評価</p> <p>看護活動とその結果</p> <p>評価</p> <p>VII. ナースからのコメント</p> <p>VIII. 本日の実習を通して学んだこと</p>
—	8	9	10	11	12	13	14	15	16													
—																						

資料 1